

1 「牛に学ぶ」学習への取り組みについて

学習前の子どもたち

(低学年)

乳製品のテレビコマーシャルで見たというだけで、「牛」を知っていると思いこんでいた子どもたちは、「牛乳」も「牛肉」も、何ら意識して食することのない日々を過ごしていたと思う。どこの学級でもよく起こることであるが、牛乳を飲もうとする友達を笑わせたり、友達より早く食べ終わろうと一気飲みしたりして指導することもあった。食育指導で栄養面を話したり、道徳や学活で命や食べ物を大切にすることを指導したときは、学習したことを理解しているいろいろなことを覚えるが、給食時間の様子を見ると、本当に分かっているのではないと感じていた。

また、「牛肉」はパック入りの物しかイメージできないし、「牛乳」が手元に届くまでのプロセスに思いをはせることもない。まして、それに関わる人の思いを知るような機会もなかった。

(中学年)

子どもたちが給食を食べている様子を見ると、味わって食べているとはあまり感じられなかった。牛乳を飲む友達にふざけた言葉を投げかけ、牛乳を吹き出させることにためらいを感じない姿も見られた。

給食にどんな食材が使われていたかという食後の問いに、2, 3の食材しか答えることができず、空腹を満たすために口に運んでいる状態に近い現状であった。

(高学年)

低学年からの積み重ねもあり、普段の生活の中で、給食の好き嫌いをして出された物を残したり、食事中にふざけたりすることはほとんどない。しかし、なぜそうしなければならないのか、そうすることにどういう意味があるのかということに答えられる子どもはいなかった。つまり、形はできているが中身が十分には備わっていないという状態である。

そんなとき、低学年・中学年担任から、「牛」を通して食を考えさせる学習に取り組んでみないかという誘いを受けた。牧場見学ができるという魅力もあり、全校で取り組むことにした。この時点では、子どもたちは、何を学ぶのか深く考えることもなく、牧場に行くことが楽しみという思いしかなかった。

取り組みまでの経緯

こうした子どもたちの実態を踏まえ、私たちは、「牛」に学ぶ必要を痛切に感じながら、何も当てのないまま手探りで前に進んだ。

まず、公共交通機関を利用して広島の子チヤス乳業へ見学に出かける方法を考え、チヤスに仮予約を入れた。しかし、見学のみで体験はできないという状況について懸念する。なんとか牧場とコンタクトが取れないかと情報収集を試みたところ、パンフレットを見て周南に藤井牧場という所があるのを知った。早速連絡を取り藤井さんのお話を聞いた。大変親切に対応していただいたが、神東からはあ

まりに遠いということで、周防大島の瀬川牧場を勧められ、相談窓口として畜産振興協会の清水さんを紹介していただいた。校区内に黒毛和種を飼育されている早馬さんを知る。清水さんを通して見学を依頼し、6月29日に全校で見学に行くことになり「牛」に学ぶ学習がスタートすることになった。藤井さんに連絡を取ったことで清水さんを知り、清水さんに連絡を取ることで今年度の一連の学習が深まっていくことになった。

取り組みの経緯

<ねらい>

「牛」について様々な視点から学ぶことによって、
食することの意味を考えさせる。(命をいただくということ)
関わる人の思いに気付かせ、今までの自分を振り返る。
食に対する意識を深め、感謝の気持ちを高めさせる。

平成21年6月24日(水) 事前指導 (体育館)

現時点でとらえている「牛」の絵を描かせ、「牛」について知っていることを書かせた。牛をちゃんととらえて描いている子どもはほとんどおらず、「描けない」「知らない」ということに気付き、早馬牧場に行き見学する視点がそれぞれはっきりした。

6月29日(月)

全校で早馬牧場を見学した。約2時間かけて放牧されている牛と羊を観察した。「牛」に慣れ「牛」をとらえることが目的であったが、思わぬ収穫がたくさんあった。事前指導の時には分からなかったことも、実際に目の前で見て解決した。

羊の見学もする。こちらは小さいから子どもたちは甘く見て近づくが、見事に逃げられる。刈った毛の塊に触れ、ベトベトしていることに驚く。

帰校後、再度牛の絵を描かせる。細かいところまでよく見ていて、今度は迷いなく描けた。牛の形だけでなく、早馬さんの思いも乗せながら描き進めていたことも感じた。

乳牛については、瀬川牧場が事情があって見学が難しいということになり、日積の河村牧場に交渉する。清水さんからも連絡をとっていただき実施することになる。7月27日に職員で河村牧場にお願ひに行く。9月に子牛が生まれるので10月初旬がいいだろうということで、10月9日に見学させていただくことにする。昔からの素朴な酪農をしっかりと守ってこられたご夫婦と牛舎を見て、子どもたちに真面目に向かわせなくてはならないという思いを強くする。

9月30日(水)

畜産試験場の子牛(和牛)が学校に来る。子牛と触れ合う事によってさらに学習を深める。あいにく雨天であったが、テントの下で様々な活動をさせていただき、その後は教室で学級ごとに話をいただいた。この日の給食は特別に高森牛を加えてもらい、「牛」と牛肉とを意識させた。

10月9日(金)

河村牧場で乳牛を学ぶ。お願いしていたので、搾乳の様子と集乳車に移し入れる一連の作業を見学することができた。搾乳の前後で乳の大きさが違うこと、一頭からずいぶんたくさんの乳が出ること、出産直前の牛からは搾乳しないことなども教えていただく。

集乳車がどこへ行くのか、給食の牛乳はどこから来るのかという搾乳とのつながりを学ぶことはできないかと、次の段階の学びを構想した。

生まれたばかりの子牛とも触れ合ったが、前回の学習で子牛に慣れており、自分から近寄って上手に接触することができた。

搾乳したばかりの乳をあたためたものを飲ませていただく。給食牛乳との違いを感じた様子だった。1リットルの牛乳になるために500リットルもの血液が必要であること、その牛乳は人間のために搾られることを知る。

堆肥場も発見した。次回はこのことについても話をうかがいたいと思った。

10月19日(月)

早馬さんを講師に招いて5,6年生が羊毛でフェルトを作る。6月に見学に行ったとき刈り取られていた羊毛をきれいに洗って持ってきてくださり、それを使って作らせていただいた。1,2年生もこっそり参加してまん丸のフェルト玉を作った。

10月28日(水)

「豚がいた教室」を視聴した。飼育している動物が肉になる現実についてみんなで考え、スクリーンに出ている子どもたちと一緒に真剣に悩んだ。動物の命をいただくということがどういうことなのかを子どもたちに投げかけるために設定した時間である。食肉センターに連れて行くか自分たちで食べるかという議論を学級でも行った。

11月13日(金)

1~4年生で、河村牧場に絵を描きに行く。早馬牧場を見学した後に描いたものよりもさらに特徴をつかむことができていた。牛に接する機会が積み重なって子どもたちが意識して牛を見るようになったからである。絵を描きながらも優しい目で牛を見つめ、牛に語りかけている姿を見ることができた。

12月14日(金)

念願のやまぐち県酪乳業工場への見学が実現した。牛から搾乳した乳が給食牛乳として目の前に届くまでを追って学ばせたいという思いが実を結んだ。畜産試験場にも行かせていただいて今までには分からなかったことにも気付くことができた。

平成22年1月23日(土)

「牛」から学んだことを保護者や地域の方に発表した。「牛」から学んだ知識や酪農家の方から教えていただいた願い、そして、子どもたちそれぞれが感じた思いを、学級の力でまとめて表現した。

2 早馬牧場での学習（早馬牧場の放牧和牛を見学）



早馬牧場の和牛です。身近で見ると、思いのほか大きかったせいか、子どもたちは、はじめはおっかなびっくり、でも興味津々。エサを手に持ち、ふれあうチャンスをうかがっています。

ブラッシング体験をしました。下級生は、上級生に手をつないでもらって、勇気を出して牛にタッチ。思ったよりつるつるの手触りだったようです。



清水さんから、牛の名前や体の仕組みについての話を聞きます。牧場の牛は、一頭、一頭に名前がつけられ、愛情を持って育てられていることを教わります。

早馬さんから、牧場ではなるべく自然に近い形で、牛を育てているという話を聞きます。雑草を牛が食べ、ふんを草の肥料にすれば、確かに無駄がないと子どもたちは納得。





早馬牧場の羊です。すぐに逃げるので、なかなか近くで観察できません。牛にはこわがって逃げている子どもも、今度は追いかける番です。

早馬牧場でとれた羊の毛を使って、フェルト作りとアクセサリ作りに挑戦しました。早馬さんのていねいな説明を一生懸命聞いて、取り組む子どもたち。



2時間かけ、羊毛に飾りを付けて、ミラーボールのようなキーホルダーを作りました。まるで、お店で売っている物のようなできばえに、子どもたちは、思わずにっこり！



早馬牧場を見学した子どもたちの感想

- ・ 私もふくめて、みんな牛肉をふつうに食べているけれど、牛も私たちと同じように生きているということを学びました。だから、できるだけ命のある生き物を食べるときは、感謝して食べてほしいとみんなに伝えたいです。
- ・ いつも何も考えずに「いただきます。」と言っていたけれど、牛を見て命の大切さについて考えさせられました。

3 早馬牧場の前後での認識の違い

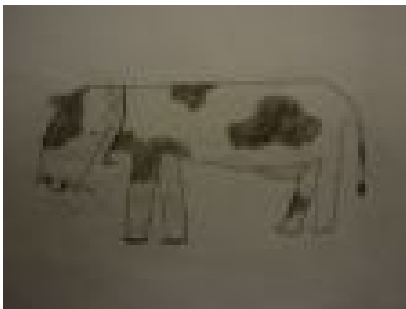


学習に入る前に、子どもたちが、牛について、どれだけのことを知っているか知るため体育館に集合しました。

まず、自分が思い描く牛をイメージしてスケッチしましたが、上の学年でも、なかなか描きづらいようでした。次に牛について知っていることや調べてみたいことを書き出してみました。



牧場の見学前と見学後の子どもたちの牛のイメージ



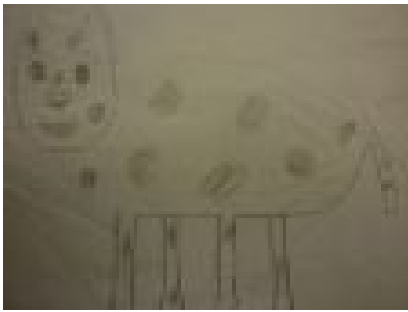
6年 男児

見学前 6/24 → 見学後 6/29



2年 男児





5年 女兒

牧場見学で子どもたちが気づいたこと、わかったこと

- ・ 尿を出す時間がすごく長かった。
- ・ 上の前歯がなかった。
- ・ 野草を食べていた。
- ・ 牛のしっぽは長い。
- ・ さわってみると、思ったよりつるつるで、あたたかかった。
- ・ ねこや犬より毛がうすかった。
- ・ のどの下と鼻の毛ははだざわりが違った。
- ・ 乳しぼりができる牛とできない牛がある。
- ・ 牛はゆっくりなイメージがあったけれど、走るとすごく速かった。
- ・ 鳴き声がすごく大きかった。
- ・ 1頭が「モー」と鳴くとみんなが寄っていった。
- ・ まつ毛がすごく長かった。
- ・ 耳がたっていた。
- ・ 角はカットしてあった。
- ・ 乳は4つあった。
- ・ おっぱいを飲むのに、首をすごく下げていた。
- ・ 鼻にある模様は一頭一頭それぞれちがう。
- ・ 生まれてすぐ立とうとする。
- ・ 牛にもこせきがある。
- ・ メスの名前はひらがなで、オスの名前は漢字で書く。
- ・ オスは売られて、メスは子どもをませせる。
- ・ 肉は場所によって名前がある。
- ・ 牛は胃が4つある。

4 子牛とのふれあい

早馬牧場で初めて牛を間近に見た子どもたちは、もっと牛のことが知りたくなってきました。学級ごとに牛について知りたいことを話し合っ、今度は子牛とふれあうことにしました。美祢市の畜産試験場から「章次郎」と「北勝平」の2頭が神東小に来てくれました。

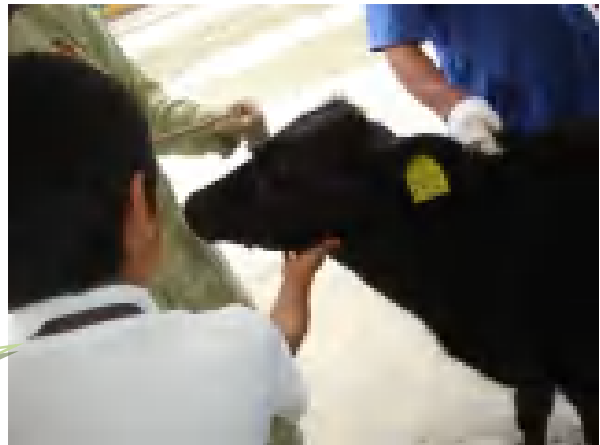


子牛に会う前に、牛たちのために気をつけることを教えていただきました。早馬牧場でもお世話になった県畜産振興協会の清水さんの話に一生懸命耳を傾けます。

あの中に子牛がいるのかな？
早く会いたいな！

子牛にさわってみると、大人の牛よりも毛がやわらかいことに気がつきます。イヤータグについては、前回の学習で教えていただいているので、子どもたちは番号が違うことや、子牛の時からつけられていることを再確認します。

大人の牛より毛がふわふわだ。
イヤータグもついているね。



子どもたちは事前にDVD「牧場に行こう」を視聴し、牛が人間と共存するために角を切ることや、切った後、焼いて止血することなどを学んでいます。そのため、子牛が角を切っている部分を見つけ、そっとさわらせてもらったようです。早馬牧場での体験のように、体験から入る学習もありますが、事前に知っておくことで、体験が子どもたちにとってより印象深く、その後の学習に生きる学びとなるような、教師側の意

図も大切にしています。

体験してみよう！（鼻紋・心音・水やり）



牛の鼻紋をとりました。牛の鼻にローラーでインクをつけて、和紙に写し取ります。人間でいう指紋にあたる牛さんの鼻紋は、子どもたちに

としてはサインをもらったような喜びだったようで、学習ファイルには喜んで大切にしています。牛さんの方は、何回も鼻紋を取られるので、鼻が乾いて大変そうでした・・・。

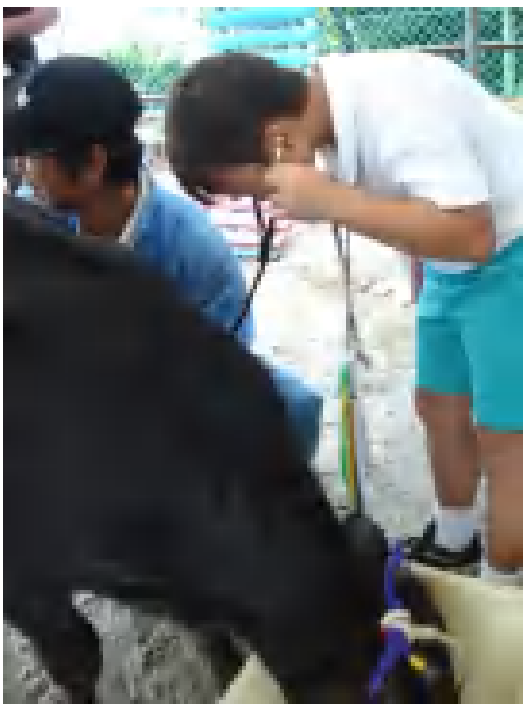
やさしくするから、
ちょっとがまんしてね。

大きな哺乳瓶で水をやったら、
子牛が水を飲むたびにグビグビ
ビッって引っ張られたんよ～。

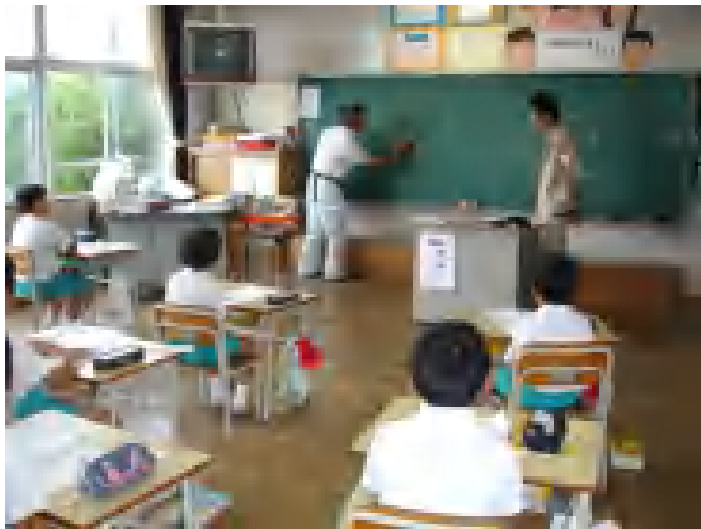
学習発表会のために
子どもが考えた台詞より



心臓の音をちょうしきで聞きました。さわった時のやわらかさと温かさ、そして心臓の音などを子どもたちが、いろいろな感覚を使って感じるこ
とが、この学習の醍醐味です！



教室での学習



学級ごとに自分たちの学習に合わせて、質問に答えていただきました。中学年では、「なぜ、牛の体が少しベタベタしていたのか」という質問が出て、獣医の山下先生に、「アポクリン腺」、「エクリン腺」など、専門用語を使って、例を挙げてもらいながら教えていただきました。写真は、清水さんに牛の胃について教えていただいている所です。専門家の方から教えていただくことに、子どもたちが真剣に耳を傾けました。

給食に牛肉のオープン焼きを出してもらってみんなでおいしくいただきました。子牛たちが畜産試験場に帰ったら睾丸を取り除くという話に、「睾丸って何ですか？」「なぜ、取り除くんですか？」と質問が始まりました。「雄の特性をなくして、おいしい肉にするためだよ」と教えてもらい、改めて自分たちが食べている、牛肉へのありがたさやそれにたずさわっておられる方々の工夫を知りました。



子どもたちが、後日の河村牧場見学（乳牛）を終えて書いた、お世話になった方々への手紙

5 河村牧場での学習（牛乳の旅の出発点）

牛が体調を崩して、乳が出にくくならないように、牛舎に入る前に気をつけることを、衛生面、行動面に分けて教えていただきました。黒毛和種の時と同じように大声を出さないこと、牛を病気から守るために足の裏を消毒して牛舎に入ることなどを教えてもらいました。



搾乳の様子を見せてもらいました。酪農家の方は、牛の乳を消毒してから搾乳機を牛の乳に取り付けます。それを子どもたちが自分の目で見ることで、自分たちが毎日飲んでいる牛乳を生産される方の苦労や工夫が分かります。

牧場を見学したり牛を見たりして疑問に思ったことを、直接河村さんに聞いてみました。出産間近の牛は乳を搾らないようににして休ませておられることを聞き、その牛の乳を見てみると、他の牛と比べものにならないくらいパンパンに張っていました。産まれた子牛には初乳を飲ませることや、その初乳のすばらしさについても教えていただきました。

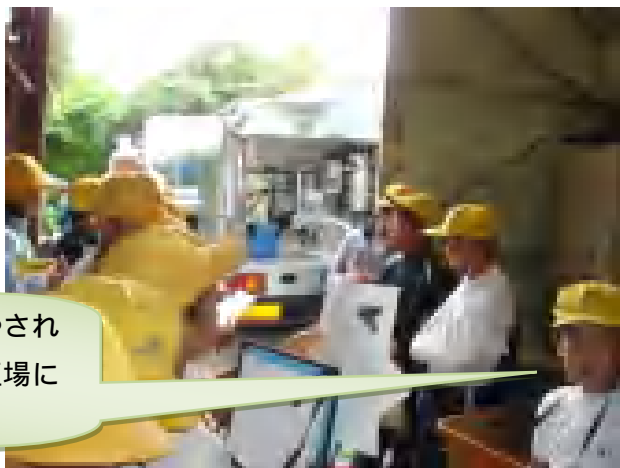


牛がえさを食べる様子をじっくり見せてもらいます。えさを食べる合間に上手にレバーを押して水を飲んでいました。子どもたちは、牛の体の模様がいろいろあるということにも興味を示していました。

からだの色がほとんど白い牛も
いるんだね～

牛乳がバルククーラーから太いホースを通してトラックに積み込まれる様子も見せてもらいました。子どもたちは冷たいホースをさわって、搾乳された乳がバルククーラーの中で冷やされていたことを実感します。

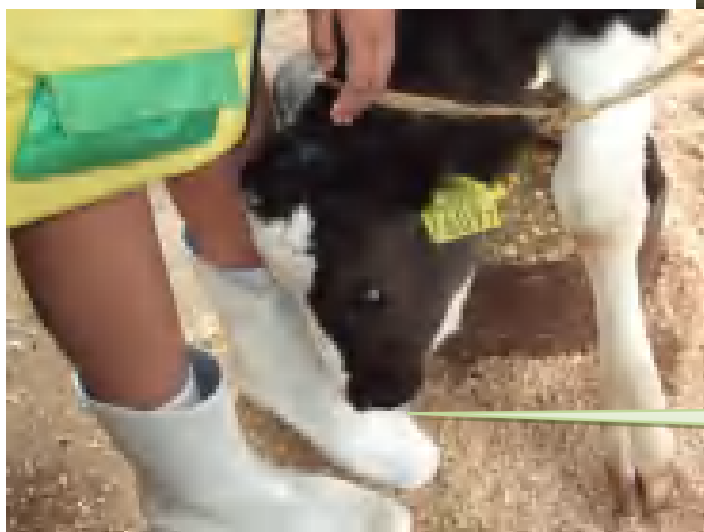
乳は、牛からしぼられた瞬間からずっと冷やされたまま、ぼくたちが飲む牛乳になるために工場に運ばれるんだなあ～



子牛に手をおいしそうにしゃぶられます。まるでお母さんのおっぱいを飲んでいるかのようです。

うわ～ くすぐったいよ～
牛の舌は少しザラザラしているんだね。

子牛は子どもたちがなでてやると、すり寄ってもっとなでてほしそうに催促してきます。河村さんは黒毛和種も飼っておられて、ホルスタインと黒毛和種、両方の子牛を同時に見ることができました。



子牛が、子どもの足や長靴をおいしそうになめていました。

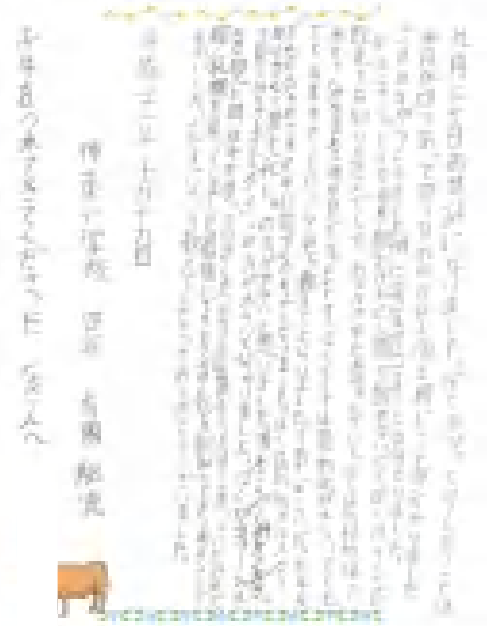
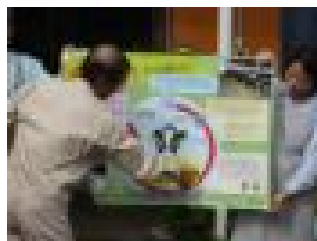
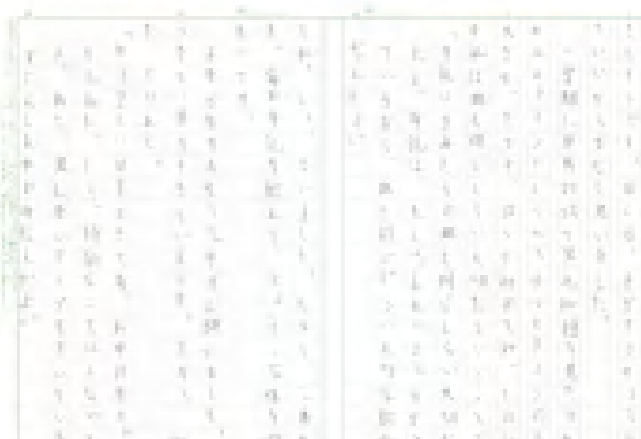
あれ～！長靴がおいしいの？

河村さんが

話してくださったこと



河村さんは牛について教えてくださる他に、自分たちの仕事は毎日ほぼ同じで、この仕事には365日休みがないから、そのことを忘れずに牛乳を大切に飲んでほしいということをお話してくださいました。また、大変なことも多いけれど、生き物である牛にたずさわっていただければ味わえない、様々な幸せがあるということも教えてくださいました。生の現場で聞く話の力強さが、その後の子どもたちの学びを支えてくれました。



河村さんご夫婦が牛に接し、牛のことを話される優しいまなざしから、牛たちをかわいがって大切に育てながら、私たちがおいしくいただく牛乳を作り続けておられることが、子どもたちに伝わってきました。河村さんお忙しい中、本当にありがとうございました。

6 河村牧場での学習（絵を描く）

後日、スケッチのため再び河村牧場を訪問。前回は、黒毛和種よりもさらに大きいホルスタインにびっくりして、尻込みしていた子どもや臭いが気になった子どももいましたが、スケッチに行ったときは、あの大きさにもすっかり慣れ、臭いも気にせず黙々と描いていました。牛も子どもたちを快く迎えてくれ、スケッチをのぞきこんでいました。

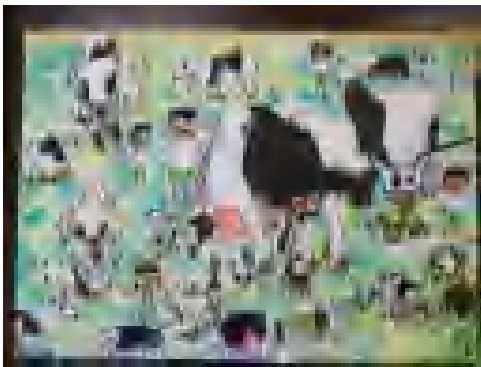
2年生男児の3点を見てみましょう。



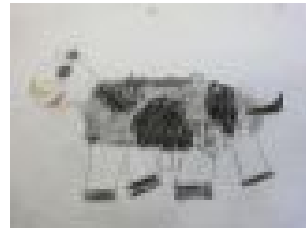
6月に早馬牧場を訪問する前は、特徴を全く意識できず、模様を何となく白黒にしただけの絵でした。体もオレンジ色に着色。11月の絵は、搾乳の様子を見ながら、牛の体のでこぼこした感じや積んである干し草の存在もつかんでいます。



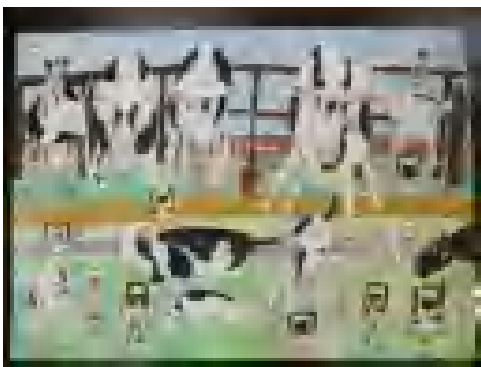
乳がパイプを通っていくところも描写できました。



こちら、楕円の体に太い棒のような足を出し、つるんとした顔しか描けませんでした。しかし、左の絵は、牛の体の感触が伝わってくるような味のある絵が描けています。



おっぱいの様子もよくとらえていてたくましいです。牛と自分たちが友達になっている温かみのある絵です。

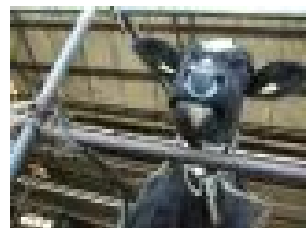


6月の絵は、白黒模様しか浮かばず、戸惑いながら描いたものです。学習を積んで描いた最後の絵は、搾乳を待つ乳牛を正面からと



らえ、体の大きさも意識しています。低学年でこの方向からしっかりとらえられていることに驚きました。足の描写も細かいです。

6月には、牛のことを知らない自分に気付き、分からないところを意識して見学に行ったことで、牛の大まかな特徴をとらえることができました。そして、秋の乳牛の学習では、肉牛とは違うダイナミックさを乳牛から感じ、迷いなく思い切り描写しました。



7 やまぐち県酪乳業工場と畜産試験場の見学

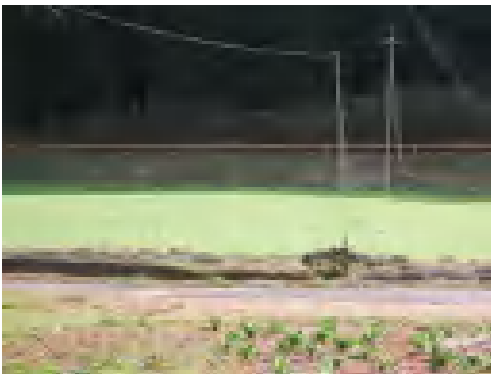
牛乳は、牛の体からどういう道をたどって子どもたちの前に届けられるのでしょうか。河村牧場での搾乳を見学させたときから、私たちはこの道筋をたどらせたいと考えていました。その時に壁となった下関市・美祢市までの子どもたちの移動手段を、畜産振興協会に解決していただき、また、県酪や試験場への連絡もしていただいて、やっと、一連の学習がつながることになりました。



DVDを視聴して説明を受けた後、牛乳を瓶詰めしたり箱詰めしたりする生産ラインの見学をさせていただきました。

見学コースの扉が開いた瞬間、私たちに、子どもたちは途中で飽きてしまうかもしれないという不安がよぎりました。想像していたより、見学コースがかなり短かったからです。しかし、ここで私たちは、子どもたちの意識が高くなっていることに気付いたのです。県酪の奥野さんの説明を聞きながら、ラインの一つ一つの動きを細かく観察し、新しい発見をしていました。給食の牛乳が詰められるところを見ながら、当たり前ですが、給食の牛乳瓶と同じことに気付いて、やっと、牧場からの流れが繋がったことを認識していたようでした。

次に畜産試験場に向かいました。9月に来てくれた子牛たちには会えませんでした。黒毛和種子の親子や口を鳴らして遊んでいる牛、堆肥を作っているところや、牛の餌となる牧草が育っているところなど、またまた、新しい発見をすることができました。



試験場に到着してすぐ目についた牧草。

広く栽培されていましたが、牛はたくさん食べるからここで栽培されているものだけでは足りないのでしょう。

「早馬牧場のように放牧するのかな。刈て乾燥させるのかな。」

そんな子どもたちの声が聞こえました。



この牧草と牛の糞が循環していることも、大事な学びのポイント。

牛の排泄物から肥料を作っているところを見て驚いた子どもたち。学校で数多くの花を育て、土作りの際に牛糞を見ているのに意識の中でつながっていなかったようです。

河村牧場でも作っておられるのですが、牧場見学に行ったときには気付いていなかったようでした。

低学年の子どもたちが、
「先生、おもしろいです。気持ちいいです、と喜んでいるのは、おがくず。これも子どもたちは初体験。高学年の子どもたちも知りませんでした。確かに、今では見るとができなくなったなあと思います。これが牛のベッドになるということを聞いて「牛さんのベッドで遊んでごめんなさい、



牛が何やらおもしろいことをしていました。口の中で舌を巻いて声を出しています。しゃべっているような、歌っているような、何ともユーモラスな声でした。試験場の方に尋ねると、「遊んでいるんですよ。牛も退屈なのでしょう。」という妙に納得できる答えが返ってきました。2年生の子どもが、その声を「からころ」という表現をしました。

「この前、学校に来た子牛はどこですか。」
子どもたちが一番気になっていた質問をする。残念ながら試験場の奥の方において会えませんでした。何気ない日常を送っている牛たちを見ると、いつか肉になってしまうことがうそのようですが、餌をたくさん食べて大きくなって、いずれは私たちの食欲を満たしてくれるのです。

8 子どもたちの変容

一年間の「牛」の学びは、私たちにも子どもたちにも、さまざまな思いを残させた。なにより、子どもたちの意識が変わったことを実感できることがうれしい。

<低学年>

まず、一番変わったのは、「牛」という動物に対する思いである。以前の子どもたちにとって「牛」は、どこか遠くにいるもので、牛乳を搾らせてくれて、白と黒の体で、のろくて……。自分たちの食する物という実感がなかった。早馬牧場で、「牛の走りは速い」「とっても大きい」ことを知り、河村牧場では、はち切れそうなおっぱいから大量の乳が搾られる様子を目の当たりにしてその行方に疑問を持ち、県酪で牛乳瓶を見た瞬間に全てが繋がった。そして、子牛が親から離されて肉牛として育てられること・あんなにたくさん出るのに母牛の乳が子牛にはいかないことを知ってからは、教室の中にお互いの食事マナーを気にかける空気が広がった。本校は、今までも食事を残さないこと、感謝して食べることは日々指導しており、低学年でもほぼ定着しているのだが、一部ふざけてしまう友達に対して大目に見てしまう傾向があった。それが、今は、みんなが「牛」を意識して謙虚に美味しくいただくことができるようになった。

学級発表会では、練習期間が短くて難しいかなと懸念したが、短時間ですばらしい集中力を発揮し、知識面も内面もしっかり伝えることができた。「牛」を語るときの表情がきらきらしていて学びを実らせた姿を見せてくれた。

<中学年>

子どもたちは、食べ物が出てきて当たり前、あるのも当たり前という感覚であった。身近な食べ物である牛肉と牛乳を与えてくれる「牛」という生き物への理解も乏しく、命をいただき、自分たちがその命によって支えられて生きていることへの感謝という認識は無いに等しかった。早馬牧場での初めての黒毛和種との出会い。まもなく肉牛になる生きた牛の存在の自覚。子牛たちとの出会いで知った、人間のためにコントロールされる牛たちの運命。初めて知ったこのようなことが、「牛肉」と「牛乳」をもとにして自分たちの命を支えている全ての食べ物へと考えを広げ、それらへの感謝を意識する確実な一步となった。その意識を生んだのは、自分たちの命を支える食べ物のもとの姿もまた命である知ったことだと思う。そして、それに携わっておられる方々の苦労や思いを実際に見たり感じたりしたことが、学びの意識を持続させ、給食時間には食べ物のかけらを皿に残さなくなった。おもしろい話で盛り上がりながらも、自分の気持ちを落ち着かせてから、牛乳を大切に飲むようになった。

3学期の学級発表会で、「いのちをいただく」という、食肉加工センターで働く方の物語を、自分たちが知り得る情報を駆使して読み深め、声と動作（演技）と音で保護者や地域の方に伝えた。この先、学校という場でなくても、この学習で学んだことを子どもたちは自分の人生の中で生かすことができると言い切ってしまうほど、牛がもたらしてくれた命の学習は威力のあるものだと感じている。

<高学年>

普段接することのない牛と触れ合え、本や写真を通して得た知識だけでは牛を本当に知っ

ているとは言えないことに気付いた子どもが多い。生きた知識を身に付けるためには体験から得るものが大きい。何より、牛と何度も触れ合う機会を持つことで、牛に愛情をもち、自分たちが生きていくために、その大好きな牛の命をいただいているという事の重大さに気付くことができたところが、大きな成果としてあげられると思う。「いただきます」「ごちそうさまでした」は、機械的に言う言葉ではないということを理解し、牛乳をふざけながら飲んでいる友達には、自然にみんなが注意し合う場面も見られるようになってきた。当たり前のことだが、なかなか徹底しなかったことができるようになってきたのも、この学習が、食について考えるいいきっかけになったからではないかと思う。

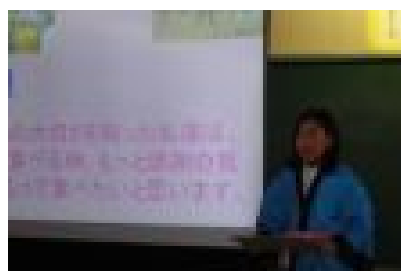
<学習発表会>

低学年は、自分たちが描いた牛の絵をペープサートにして演じたり、日常生活の場面で牛の話をしているところを取り入れたりして、心を込めて「牛」を伝えた。長い台詞もなんのその、牛乳パックの秘密も分かりやすく話すことができた。



中学年は、食肉加工センターでは働く方の思いとそこで起こる牛を搬出する農家の思いを描いた物語を、動作、音を交えた音読劇で表現した。大人も改めて考えさせられる、命と食へのありがたさについて、子どもたちが心を込めて見事に表現した。

高学年は、情報教育も兼ねて、「牛」の学習を自分たちでまとめプレゼンテーションした。データ作りから発表の操作まで自分たちの手で行うことができたのは、一連の学習を続けることによって「伝えたい」という思いが募ったからである。



子どもたちの姿を見ると、この一年間、素直に感じて培っていったことを感じる。私たちだけではどうしようもなく途方に暮れかけているときに、たくさんの方のご理解・ご協力・ご厚意に恵まれ、ただの体験に終わらない確かな学びとなった。畜産振興協会・畜産試験場・やまぐち県酪の方々、早馬さん、河村さん、藤井さん、マイクロバスを運転して早馬牧場に連れて行ってくださった山脇さん、「本当にありがとうございました。」

どんな言葉で伝えても伝えられないくらいの感謝の気持ちを私たちは心に抱いている。

9 今後の取り組み

これまでの学習で子どもたちが学んだこと

- 1 わたしたちは、多くの生き物の命をいただいて生きているということ
食育との関わり
- 2 酪農の方は、出荷するまでの毎日を、牛に愛情を持って育てておられること
(利益だけのために牛を利用しているのではないこと)
- 3 わたしたちが食べ物を口にするまでに、たくさんの方が関わっているということ
キャリア教育との関わり
- 4 わたしたちの食生活を満たすために、命をコントロールされている動物がいるということ
- 5 「食べる」ということについて、感謝の気持ちを持ち、命を無駄にしない心を自分で育てること 道徳教育(生命尊重 感謝)との関わり
- 6 学んだことや感動を、よりの確に、より分かりやすく人に伝える力を身に付けること
表現力向上との関わり
- 7 命あるものに対して、優しい気持ちを持つことができること
愛鳥活動・花いっぱい活動との関わり

この1年間の貴重な学びは、子どもたちに「牛」への意識を変えさせ、「牛」に関わる様々なものに目を向けさせた。見学によって得られた知識とともに、携わったおられるたくさんの方々の思いを知ることができ、「命をいただく」ことを意識し始めた。出発点に立ったようなものである。

来年度は、早馬さんや河村さんとの接触を続けながら、今年度実現できなかった瀬川牧場とも連携を取って、さらに広い視野での学習を組み立てたいと思う。

早馬牧場：循環型農業について深める。

河村牧場：牛舎での仕事をさせていただいて、牛を育てるために毎日欠かせない現実を知る。

瀬川牧場：これからの酪農を担う若い酪農家の方から、酪農や牛に対する思いを学ぶ。牛から牛乳をいただくのと同様に、鶏からは卵をいただいている。牛だけでなく、鶏や豚についても、飼育の現場に伺える機会を見つけて、子どもたちの意識をさらに広げたい。また、学習が深まって子どもたちの意識が高まってきたら、命が肉に変わる場所にも目を向けさせることができるのではないかと考えている。